

「大学入学次における女子学生のキャリア意識 —初年次教育・キャリア教育検討に向けて—」

亀田 温子

1 はじめに

「女性が社会でこんなに活躍しているとは思わなかった」「結婚後も女性が仕事をしていることがわかってよかった」。1年学生の選択履修科目「女性としごと」（全受講学生数205人）で、多くの受講生からこんなつぶやきが聞こえてきた。現代社会で働く女性たちの多様な姿は、情報化社会の中で様々なメディアに登場している。しかし、こうした声が出てくるのは、高校までの学習の中で働く女性のことが以外と伝わっていない、見えていないからだろうか。職業生活と自分との関係（自分が仕事に関わっていくこと）について、入学時の学生はどのように考えているのかを授業を通して探ってみた。

〈本稿の目的〉

本稿は、こうした受講生の声の実態をとらえるべく、共通科目「十文字学」の中の女性関連科目（選択必修）「女性が学ぶ」（1Aクラス93人）と「女性としごと」（205人）を受講する1年生の提出資料（フィードバックシート、レポート）を基に、そのキャリア意識を学科別に分析しその実態をとらえることを目的とする。と同時に、職業人・社会人養成の役割をはたす大学教育において、初年次教育、キャリア教育をどのように行うか、その検討に資する基本資料としたい。

<改組・カリキュラム改革・学科の特性>

十文字学園女子大学は2011年4月から、これまでの社会情報学部、人間生活学部の2学部構成を人間生活学部1学部構成とする再編をおこなった。それに伴う新たなカリキュラム改革がおこなわれ、入学したすべての学生が大学生として学習する基礎共通科目の「十文字学」が設置された。その1つである「女性関連科目」では女子学生自らが考え社会の状況を明確にとらえられるよう「女性を学ぶ」「女性の心と体」「女性としごと」の科目を設け、1年前期から開設している。

学部7学科の構成は、大枠としては専門職養成関連の5学科と企業への社会進出を目指した一般企業人養成関連の2学科である。専門職養成関連学科には、幼児教育学科／幼稚園教諭、保育士養成、児童教育学科／小学校教員養成、食物栄養学科／栄養士、管理栄養士養成、人間福祉学科／福祉士養成、人間発達心理学科／養護教諭養成)がある。ここでは関連の資格を取得し専門職領域に就職する者が多数を占める。こうした女性専門職は女性の職業としての歴史も長い。入学生は入学前からその専門職に就くことを目指して大学・学科を選び、入学し、大学での学習を想定するのである。

それに対して、一般企業人養成学科である生活情報学科、メディア・コミュニケーション学科の2学科は、均等法成立以降多数の女性が進出している企業就職につながる学科であるが、高校生にとっては保育者などの専門職ほど明確な将来像はもちにくい形での入学となっている。

こうした学科の在り方が、大学入学後の学習、キャリア意識形成にも大きく関連することは予想できる。大学教育でどのような人間形成を行うか、さらに各学科の目指す大学卒業後の社会人像につながるより有効な初年次教育のありかたを探るためにも、「入り口」の段階の学生の実態をとらえることは重要なことといえる。

2 テーマの背景：女性のキャリア形成が重要テーマに

<キャリア教育への注目>

若者の社会参加を巡る近年の課題の1つに、職業意識形成をどのように行

「大学入学次における女子学生のキャリア意識—初年次教育・キャリア教育検討に向けて—」

い社会と関わるかの問題がある。学校段階からのキャリア教育が提唱、実施され⁽¹⁾、さらに大学教育においても近年キャリア形成に関わる学科が新設され、また専門教育だけでなく社会人・職業人に関わる社会人基礎力の関連科目が導入されはじめた⁽²⁾。また若者を社会参加する市民へと成長させる方途として、1970年以降アメリカでの市民教育の実践からはじまったサービス・ラーニングについても、現在日本で注目されている⁽³⁾。

変動する社会における現代青年期の在り方について、適応から自己形成の時代へと移行しているという見方もある⁽⁴⁾。青年期を大人の世界にどのようにつなげるか、これまでの進路指導ではなく生涯にわたるキャリア教育の視点から自己形成を行うことがますます重要とされている

＜女性にとり重要テーマに＞

そうした中で、男女雇用機会均等法 25 周年を迎えた現在、かつては男性の課題とされていたキャリア形成が女性にとっても大変重要なテーマに浮上している⁽⁵⁾

女性の職業生活が長期化するなかで、就職という入り口の一時点だけでなく、就業後のキャリア意識形成、生涯にわたっての職業生活を含めた生活プランをもつことは、ライフサイクルとの関連で多様な就業を想定される女性にとって大きな課題となっている。近年とくに、職業に「参加」するだけでなく、仕事についた後にどのように職業生活を展開するかを見据えた長期的視点が必要とされている。

＜女子大学におけるキャリア形成支援の取り組み＞

女性のキャリア形成のテーマは、仕事について後の成人女性の問題というだけでなく、これから社会人となる大学生、特に女子学生をかかえた女子大学にとっては、大学教育の基本、女子大学の存続理由ともかかわる重要なテーマとなり始めている。大学教育においてキャリア意識形成とキャリア支援の取り組みがすすんでおり、東京女子大学のように、大学教育全体との関わりで女性の自己確立とキャリア形成を大学教育の基礎として展開する大学もある⁽⁶⁾。また聖心女子大学ではキャリア教育の指導プログラムの開発を行い⁽⁷⁾、日本女子大学では生涯学習センターが成人女性のキャリア形成を「リ

カレント教育課程」として実施し、中高年女性の学習機会を拡充し再就職につなげている⁽⁸⁾。また昭和女子大学では、社会人女性との交流を含んだ、キャリア意識形成を含んだメンターによるシステムづくりに取り組み始めている。

まさに生涯にわたる女性の職業支援を視野に入れて、入口の就職だけでなく、その後のキャリア形成を行う女性へのエンパワーメント機関として女子大学が機能し始めていることは注目に値する。

3 分析対象科目概要と受講生

今回のキャリア意識分析の対象とする2科目について、担当状況、受講学生は次のようである。

①「女性を学ぶ」(1A クラス・93人) 一教員4名がオムニバスで担当。

選択科目。亀田は「女性の生涯とキャリア」のテーマで3回担当。

- 学習内容：
- 1 こと先生の生涯と女性のキャリアのつながり
 - 2 女性の職業進出・活躍する女性たち
 - 3 キャリアをつくる様々な支援・企業の制度

②「女性としごと」(205人、内1年生152人) 亀田が全15回担当。選択科目。

- 学習内容：
- 1 「こと先生の生涯」女性としごとの視点から見る
 - 2 教育を受けることは何につながるのか・世界の女性と教育
 - 3 「キャリア」「仕事」が現代女性のキーワードに
 - 4 ライフサイクルの変化
 - 5 ジェンダーにとらわれない職業選択・生き方の拡大
 - 6 女性の職業進出の進化・就職からキャリア形成へ
 - 7 職業進出を可能にした男女雇用機会均等法とその後の動き
 - 8 キャリア・職業生活を支援する人・物・機関

- 9 女性が働き続けるために・子育てのこと
- 10 報告会・授業のふりかえり
- 11 社会人としてもとめられる力・社会人基礎力
- 12 職場環境の変化・商品開発など活躍する女性たち
- 13 ワークライフバランス，子育て支援
- 14 新たな働き方・人材育成
- 15 女性起業家，リーダをそだてる

上記①②ともこれまでに関連した科目は開設されていたが，2011年度初めて開講された科目である。担当回数などの状況が異なるので，それぞれの科目ごとにデータをまとめた。授業時に学生が記入したフィードバックシート，最終レポートを活用し，量的に扱える物は数値を示し，文章による内容表現については質的なデータとして扱っている。また，学科別データについては，受講者が一桁と少ない場合は数値解釈は行っていない。全7学科の学生が履修しているとはいえ選択科目であるため，学科の全体像がとらえられているとは言えないが，一応の傾向をつかむことは可能であると考えられる。

4 キャリア・モデルをもつ女性専門職希望学生・もちにくい企業就職希望学生

以下，受講学生の資料からとらえたキャリア意識のデータを示し分析を行う。まず，将来自分がつく仕事のキャリア・モデルを入学段階で持つか否か尋ねた質問の回答である。

① 「女性を学ぶ」93人のデータ

表1は「女性を学ぶ」(1Aクラス)93人のキャリア・モデル有無のデータである。

表1 卒業後の職業についてのキャリア・モデル有の割合（「女性を学ぶ」データ）

	幼児教育	児童教育	心理	食物栄養	福祉	生活情報	メディア	社会情報	合計
受講者数	17	22	1	7	10	25	6	5	93
キャリア モデル有	15	19	1	1	4	3	6	2	51
%	88	86	—	—	40	12	—	—	55%

受講者が10人以上の学科を対象に、大学卒業後に就く予定の仕事が明確でキャリア・モデルが「有る」割合が高いのは幼児教育学科88%、児童教育学科86%と多数にのぼり、福祉学科40%とつづく。一方、生活情報学科は12%にとどまり、将来の仕事にむけて自分が目指すキャリア・モデルを持つものはきわめて少ない。以下、学科別に具体的なキャリア・モデルを示す。

<幼児教育学科>

キャリア・モデルを持つ率が高い（88%、15人）幼児教育学科学生では、自分自身の幼稚園当時の担任の先生、中学時に職業体験で出会った保育士さん、さらに幼稚園の先生である母親（3人）など、自分自身の生育歴の中で出会った保育関連の人たちやその仕事をしている母親など、周辺の人たちがキャリア・モデルとしてとらえられている。

「幼稚園のときの担任の先生がわたしのキャリア・モデルだ。その先生と出会い、幼稚園教諭を目指した。現在もその先生とは連絡を取り合い、将来のことを相談したりアドバイスをもらったりしている。どんな職場が良いかなど細かい適切なアドバイスをしてくださる。」（幼児教育学科（以下J A）。さらに「なりたいこと」のストーリー（小さいころ、小学校、中学校、高校、現在）の記述から成長過程に伴う変化をみると、「小さいころ」または「小学校」のころから保育者になることを目指している学生が多い。しかし、職業の継続期間のイメージは多様である。短期就業で退職後は専業主婦を希望するなど、保育者を短期間の職業イメージでとらえている者もある。一方、15名中2名は「将来的に園長になりたい」「長い期間続けたいので保育士になることをゴールとせず、皆を引っ張っていただける園長先生になれたらと考えている」など園長を自分の将来像に挙げている者も見受けられ、就業後のキャリアを含んだ長期視点をすでにもっている。

＜児童教育学科＞

キャリア・モデルを持つ者は19人（86%）と高く、小学校時の担任の先生、高校の部活顧問の先生ほか、母や叔母である小学校の先生など、家族がキャリア・モデルとなっているケースが保育士の場合と同様に見受けられる。「叔母が教師。生涯続けるのがかっこいいと思った」と長期継続できる職業であることが、キャリア・モデルの1つの要因として含まれている。

前述した学科構成から予想できるが、幼児教育学科、児童教育学科の専門職養成学科の受講学生は、自分の成長プロセスでみる専門職たち（保育者、幼稚園の先生、小学校の先生など）がキャリア・モデルとなり、自分のなりたい職業と結び付き、自分の意志による職業決定につながっている。何をするか、その職業生活がとても「見える」状況にあるといえる。

＜生活情報学科、メディア・コミュニケーション学科＞

一方一般企業就職関連の生活情報学科受講生の場合、大学入学の時期にキャリア・モデルを持つものは25名中3名（12%）にとどまり、具体的には「高校の時に会ったカウンセラー」「情報系の職業」と記されている。これまでの学校生活や地域・家庭生活で、企業の中で女性がどのように仕事をしているかのイメージを把握し、具体的なキャリア・モデルを持つことは極めて少ない現状が映し出されている。

メディア・コミュニケーション学科は受講6名で全員キャリア・モデル有とカウントされている。具体的には「中学時の司書教諭」や中国人留学生は「貿易会社の社長」を挙げている。

これまでみてきたよう、保育士や小学校教員が女性専門職として高校生たちに「見える職業」であるのに対して、近年企業で働く女性が多いとはいえ企業での職業生活は大学入学者の成育歴には含まれておらず、キャリア・モデルにも出会うことがなく「見えにくい職業」となっている。

② 「女性としごと」 152人のデータ

将来の仕事にかかわるキャリア・モデル有する割合について、同様の傾向が「女性としごと」1年受講学生152人の場合にも読み取れる。こちらは最終レポートの記述からとらえている。

表2 卒業後の職業についてのキャリア・モデル（「女性としごと」データ）

	幼児教育	児童教育	心理	食物栄養	福祉	生活情報	メディア	合計
受講者数	41	0	7	58	7	18	21	152
キャリア モデル有	16 (39%)		-	21 (40%)	-	2 (11%)	3 (14%)	42 (28%)
モデル目 標有	24		-	37	-	4	10	75
モデル有 合計人数	40		-	58	-	6	13	117
%	98%		-	100%	-	33%	62%	77%

<幼児教育学科>受講生 41 名、キャリア・モデルを明確に持つのは 16 名 (39.0%)、特定な人はいないが仕事の明確なイメージを持つ者 24 人 (59%) 合わせて 40 名 (98%) と大多数が大学入学時に卒業後の仕事について明確なイメージを描き、キャリア・モデルを有している。「仕事は生涯継続したい。子育て中の女性が働きやすい保育園や幼稚園を作りたい」「児童館で働きたい」などである。

<食物栄養学科>受講生 58 名中明確なキャリア・モデルをもっているのは 21 名 (36%) と 3 分の 1 にのぼり、モデル目標を持つ 37 名を合わせると 100% となる。「女子栄養大学の虎石さんー」など具体的な名前が挙がる場合もある。栄養士として子供と関わる保育園での仕事、老人ホーム、スポーツ関連で栄養指導をしたい、病院で、菓子にかかわるパティシエ、地域の保健センター、給食センター、フードスペシャリスト、企業で食品の商品開発を行うなど、かなり多様なキャリア・モデルをもっている。これは栄養士として多様な職場で活躍できることが認識されていることを示している。単に栄養士になるということだけではなく、どのような職場で何を行うかという次の段階のイメージも形成している。企業という職場の選択も含めてキャリア・イメージが非常に明確に描かれている。

<生活情報学科>受講生 18 名でキャリア・モデルを持つ者は 2 名 (11%) にとどまり、「キャラクターメーカーのマーケティング部」「母が行っている薬局の化粧品担当者」が記されている。情報関連の職業としてシステムエン

ジュニア（SE）などは一般に知られるところであるが、こうした情報関連の仕事は受講生たちはキャリア・モデルとしては認識されていない。ここでも、前述したように、企業で働く女性の姿は「見えにくい仕事」となっていることがわかる。

特定の人ではないが目標があるものは4人で「接客の仕事をしたい」「旅行会社で働きたい」「本が好きなので図書館で働きたい」「編集者や番組プロデューサー」があがっている。これを含めても職業モデルをもつものは18人中6名（33%）と少ない。

ここで注目されるのは、希望するしごとや職業生活への展望が見いだせないことが率直に書かれていることである。「仕事につき、その後の生活はどうなるか想像したこともない。やりたいと思えることもない」「悩んでいる、不安がある」「やりたい仕事はみつからない」「何をしてどう生きるのか、自分の中で明確になっていない」「どのような仕事をしたいというのは持っていない」など、社会とかわかる自分の生き方が未だ明確にならず、それをものとめて大学へ入学したという思いを持つものが少なくない。

<メディア・コミュニケーション学科>受講生21名で特定のキャリア・モデルを持つものは3名。「テレビ局のディレクター」「アナウンサー」「芸マネージャ、渡辺プロダクションの渡辺ミサ社長のような人」を挙げている。やはりメディア関連の仕事とを学科と結び付けてイメージしていることがうかがえる。さらに特定のキャリア・モデルはいないが就きたい仕事がある者は10人であり、「音声ディレクター」「マスコミ関連」「ディレクター」「新聞記者」「雑誌編集者」「レコード会社」など、メディア関連の仕事イメージするものは多い。学科全体では、21人中13人（62%）がキャリア・モデルをもち入学している。

③専門職学科はキャリア・モデルを持つものが多数

このように「女性を学ぶ」「女性としごと」の両科目データからわかることは、専門職養成を行うことを目的とする幼児教育学科、児童教育学科、食物栄養学科の入学者は、その専門職を目指したキャリア・モデルを持つもの、また特定のキャリア・モデルはいないがどのような仕事をするかの目標を入学時にもっているものが大部分であることが明らかである。実際に就業後の

キャリアプランはこれからであるが、一応自分が何を目指しているか、その方向性を持っている。

一方、一般企業就職関連学科の場合、メディア・コミュニケーション学科は特定のキャリア・モデルを持つものは少ないが、メディアとかかわる仕事を想定している場合がやはり多くみられる。その意味では、メディアに関わる職業が高校生にはいくらか見えるものになって入学していることがうかがえる。生活情報学科の場合は、何の仕事に就くという段階にはいたらず、職業とのつながりが自分の中でとらえられていないので、それを決める時間として大学生活を考えている。

専門職関連学科の学生は入学へのアプローチとしてすでにその学科の専門職に就くことを希望し、関連の職業生活を描いているのに対して、生活情報学科の入学生は、企業就職希望ともいえず、むしろそうした進路の方向性を決めかねている人たちが入学している実情がとらえられる。

5 職業生活についてのイメージ

大学入学段階で、自分の将来の職業生活についてどのようにイメージしているかを記述から把握した。

①共通する傾向・根強い性別役割意識

「この授業に参加する前は、自分の将来の職業についてあまり考えることはなかった。(人間発達心理学科 (以下 J C))」「私は仕事に就き、その後の生活はどうなるかと想像したことがない (生活情報学科 (以下 J F))」など自分としごとのことがつながらない思いや、「女性としごと」という言葉を聞いてこの2つの言葉はあまり接点がないのではとおもってしまった。私の中での考えは、女性はある程度職業について結婚を機に仕事から離れるというイメージだったので、まったく想像がつかなかった (J F)」というように、高校から大学に入学した時点では、大学卒業後の職業生活が想定の中に入っていない学生もいる。

また、次の既述のように「結婚したら専業主婦に」というイメージを持つものは、学科を問わず多数見受けられる。

- ・わたしはこの授業を受けるまで男性は外で仕事をし、女性は家庭を守らなくてはいけないのだと強制的に思っていました。それは私の家族がそのような固定観念をもった意識をしている環境だということが大きくあると思います。(食物栄養学科 (以下JD))
- ・以前は、女の人は結婚したら家のことをしなければならいので、仕事は辞めなければならいのだと自然と考えていました。それは、自分の両親も父は毎日仕事に行き、母は家にいて炊事や洗濯、掃除などをしています。このような家庭は周りにもたくさんありました。だからこれが当たり前なのだと思っていました。(JA)
- ・私はいままで、将来結婚したら専業主婦になって育児をがんばって旦那さんに養ってもらえばいいと思っていました。そのほうが育児や家事に専念できていいし、仕事をしながら出産・育児なんて不可能ではないけれど、私にはできないと思っていた。(人間福祉学科(以下JE))
- ・就職をして結婚したら仕事をしなくても暮らしていける人と結婚しよう、なので結婚したら仕事を辞めようと思っていました。(JC)

このように自分の周囲の環境からか、結婚、子育てにより女性は家庭のことをするという性別役割分業意識は強く、将来像としてもこうした状況をイメージしていたことがわかる。今日、新聞やニュース、雑誌などにより社会で仕事をする女性の情報はあふれているが、学校教育のなかで社会で活躍する多様な働く女性の姿は伝わっていないようだ。また、自分の家庭環境とは異なる多様な情報に触れ、両親の役割像と異なる新たなモデルに出会うことも少ないようだ。

②学科比較：生活情報学科と 食物栄養学科

全学科に性別役割分業意識を持つものが多数いるとはいえ、キャリア・モデルを持つものが大多数の専門職関連学科と、それを持つ割合が少ない一般企業職関連学科では職業生活についてイメージの相違が予想される。詳細になるが学科別学生の「職業生活のイメージ」をとらえてみる。

<生活情報学科—短期就業イメージ>

一般企業職関連学科の生活情報学科(19人)の場合を見てみよう。

- ・普通に大学を卒業して、就職をし結婚したら終わりだと思っていた。
- ・夢ややりたいことがなかったから大学というまだ決められていない枠に入った。
- ・仕事に就き、その後の生活はどうかと想像したことがない。
- ・女性が仕事をするについてあまり深く考えていませんでした。なぜかという自分自身のなかで、仕事は男性がするものと勝手に考えていたからです。
- ・わたしは全然職業のことを考えたことがなくて、どんな職業になりたいとか考えたことがなかった。
- ・何でもいいから普通の仕事につけばいいなと思っていました。
- ・まず出産、子育て後は仕事なんかできないと思っていました。
- ・普通に就職して結婚すればいいやと考えていた
- ・女性だから就職しても結婚して子育てをするときになったら、そのために働くことをやめた方がよいのかなと思っていました。
- ・大学を卒業して就職し、数年経ったら結婚し、子供ができれば退職して、こどもが大きくなったらパートとしてまた働きにでる—という想像をしていました。私の母がそうだったので、わたしもそう考えるようになったのかもかもしれません。
- ・女性は結婚したら仕事をやめて、家庭に入るものだと思っていました。

以上のように19名中11人は、卒業後仕事に就くことは一応想定しているが具体的なことは決まっておらず不明確である。就職はするが短期就業による性別役割分業意識が強く、結婚や出産後については仕事と結び付かずほとんど想定がない状況である。

職業生活のイメージとして具体的に仕事をあげた学生は1名である。「編集者」を第1希望に、「小説家」「番組のプロデューサー」などを挙げている。また職業生活について明確な考えをもたないことを不安に思っている次のような記述もある。

- ・今、このような仕事をしてみたいというのは持っていません。まだ1年生だから大丈夫と思っているところもあるかもしれません。そのうち決まるだろうと思っていたらあつというまに4年生になってしまいそうで怖いです。

高校までの段階で、自分の将来につながる社会人としての具体的な職業モデルがまだみつからないため、その後の職業生活のイメージも描くことはできていないと考えられる。

＜食物栄養学科—役割分業から職業継続希望へ＞

前述のように、多くの学生がキャリア・モデルをもち、栄養士関連の仕事を想定している。

- ・管理栄養士になりたくて大学に入学したが、管理栄養士になって就職した後はどのように過ごしたいかと考えたことがなかった。
- ・私がおもっている社会や仕事のイメージは、女性もそれなりに活躍していて、男女平等ではあるが、会社のトップや幹部、官僚などの仕事はまだ男性が多いというイメージ。
- ・大学卒業後は管理栄養士という資格を活用して給食関係の仕事を何年かして、結婚を機に寿退社して家庭を持ち育児や子育てを主婦として行い、子供が中学生くらいに大きくなったらパートして生きていく――。
- ・結婚した場合、家庭（子育て）と仕事の両立は難しいと考えていました。会社側も「女性はすぐに結婚して家庭に入る」という固定観念にとらわれているのかと思っていました。一母が専業主婦で、その母を見て育ったので「家庭と仕事の両立支援」という言葉がピンとこなかった。
- ・女性の職業生活が当たり前のようにになっている今、いまだに産休などのサポートが充分でない会社もあり、以外なことだったのでショックを受けました。
- ・母は結婚前に仕事をやめ、わたしが保育園に入るころに再就職した。わたしは「女の人は結婚したら仕事を辞めて、子供が大きくなったら再就職する」というのが当たり前だと思っていました。

このように、栄養士関連のキャリア・モデルをもつものの結婚後の職業継続のイメージは持たず、性別役割意識が浸透していることは、生活情報学科と共通している部分もある。しかし、キャリア・モデルを持ち一定の職業（この場合は栄養士関連）を目指していることが明確になっているためか、次にみるように学習による変化は大きい。

6 学習後の変化

15回の学習を行うことで、受講生の女性としごとについての認識は大きく変化していく。変化した主な事柄として、下記の5つがあげられある。

①職場で活躍する女性の存在を知り、自己のイメージにつなげる

まず第一は、冒頭に示した「社会で活躍する女性がこんなにいるとは思わなかった」ことと関連し、多様な形で職業と関わる女性たちの存在を知識として持つことで自分の職業意識を拡大し、さらにそれを自分の将来イメージにつなげている。

- ・この授業でたくさんの活躍をしている女性を見て、考えが変わりました。せいかく女性の働ける場を（前の女性たちが）作ってくれたのだから、仕事をしないのはもったいないと思ったし、育児休暇などの制度が今ではあって、仕事との両立は大変だけど可能なので、家事育児と仕事を両立した生活を送っていきたいと思うようになりました。（JD）
- ・（スポーツ選手の栄養管理を目指して入学）世間には様々な仕事があるのだと思い、もっと視野を広げていこうと思いました。（JD）
- ・これまで〇〇になりたいと思ったとしても、あきらめてしまうことが多く、将来の夢も強く思えるものを見つけることができませんでした。しかし、様々な環境や社会で働き活躍している女性について学び、考えは変わりました。強く思い、努力をすれば（自分の思いが）叶うのではないかと考えるようになりました。（JC）

②視野を広げて考える・結婚後の就業イメージがもてた

キャリア・モデルを持ち卒業後の仕事は一応イメージしているが、他に働く女性たちの実態を知ることで、自分の将来についても視野を広げ、さらに結婚後・出産後の職業生活をイメージするまでに考える範囲が拡大している。

- ・将来相談所に勤めることしか考えていませんでしたが、授業を聴きもっと視野を深めていこうと考えさせられました。心理学の仕事とは相談所以外でどんな仕事があるのだろうか？ 卒業したひとたちはどんな仕事をしちえるのか、などに興味をもった。（JC）

- ・授業で多くの女性が結婚後も働いていることを知り、今まで考えていた結婚後の女性の生活スタイルの幅が広がった。そして実際に結婚後の女性が働いている姿を見て、働いている女性は美しいと思うようになった。
- ・出産・子育て後は仕事なんてできないと思っていましたが、子育て中でも働ける職場が今はあり、私が思っていた以上に女性が働きやすい時代になっているのだと感じた。——働く女性が当たり前になる時代になると思うので、わたしも将来働く女性として社会で活躍したいと思います。

③制度の活用を想定に入れる

実際に育児休業を活用し職業継続している女性の姿を見ることで、制度を知るだけでなく、その制度活用を目指した自分の就職活動につなげている。子育てや休暇制度が女性本人のキャリア・ライフプランづくりにつながりはじめている。

- ・これから仕事を見つけていくのに、育児休暇制度がちゃんと整っているかや、結婚後も働けるような会社を選ぶことが大切だと学んだ。
- ・再就職しやすい制度を取り入れている会社があったり、勤め先に保育園があったり、その他女性が働きやすい環境があるということも、大切なのだと感じました。(JD)
- ・結婚・出産後の仕事については退職するだけが女性の生き方ではなく、産休を利用することで仕事を続ける道もあるし、一度仕事を辞めてしまっても復職という道もあることを知り、私も仕事と育児を両立していきたいなと思いました。

④先輩女性たちの改革・努力を知る

男女雇用機会均等法成立のDVD視聴などを通して、女性である自分の職業生活が先輩女性たちの様々な改革や努力により成り立っていることを認識することにより、自分たちはよりがんばって何かを行いたいというモチベーションを高めることにもつながっている。まさに、学ぶことが自分の意欲を高める力となっている。

- ・今ある現状は昔の女性の努力の賜物であったということを知ったことです。
- ・印象に残っているのは、女性の社会進出にあたって大きな壁を打ち破り、

闘ってきた強い女性の姿である。十文字こと先生の女性教育にかける思いや、法律から女性への差別をなくすために奔走してくれた方がたの努力。法律を変えていったり、女性としての実績を積み重ねていくことで、私たちの未来はより良いものとなっている。そんな姿を見て、自分も女性として立派に働き、いずれは家庭をもって家族を支えていける女性になりたいと考えるようになった。(JD)

- ・女性が働くことについて、今の状態になるまでたくさんの女性が関わってきたりしたことを知り、本当に感謝しています。——固定観念を打ち破って仕事をしてる人がいたり、女性をサポートする仕事をしている人がいたりすることを知りました。頑張っている人がいるのだから、その人たちに負けないように頑張ろうと思ったし、もっと働きやすい社会になるよう、私たちがさらに変えていこう！ と強く思いました。(JD)

⑤社会人基礎力の重要性に気付く

「女性としごと」の授業では、11回目に「社会人として求められる力—社会人基礎力」の学習を導入した。職業をイメージし職業継続のキャリアプランをすでに意識している学生は、専門的な能力だけでなく、人とのつながりや集団のなかで仕事をおこなっていく「社会人基礎力」の重要性がすぐに理解できている。

- ・定年まで仕事をしていきたい。定年まで仕事をしていこうというだけでなく他に考えなくてはいけないことがあることに気付かされました。その1つが「社会人基礎力」である。——私には「前に踏み出す力」「チームで働く力」がない。——普段からどのようにせねばいけないのか、どうしたらもっと力を発揮できるのか、それを考えさせられた。
- ・さらに今の時代、仕事ができる能力だけではなく「社会人基礎力」ということを聴き、自分に社会人基礎力のなさを改めて感じた。——苦手だから逃げるのではなくこれからは積極的に話しかける(などの)体験を増やしていきたいと思う。(JC)

⑥大学で自分の進路探しに向き合う

上記①から⑤までは、学習により自分が想定していた職業イメージや職業

生活を多様にとらえ、自分の職業意識を拡大している場合である。一方、想定する職業イメージを持たない学生は、社会で活躍する女性たちの姿を見てその活躍の実態に驚いている。現実に関し、ようやく自分自身と向きあってやりたいことを見つめることに取り組もうとし、働いている女性の現状をもっと知るべきと関心を持ち始めている。つまり、ようやく大学で自分の進路を探し、女性の職業生活について向き合い始めたのである。(以下は生活情報学科受講生の記述)

- ・全然職業のことを考えたことがなくて、授業でいろいろな話を聞いて、遅いかもかもしれませんがしっかり考えていかなくてはいけないんだと実感しました。
- ・授業をとって、職業生活についての関心が一気に変わりました。それまでは女性が仕事をするということについてあまり深く考えていませんでした。なぜかという自分の中で、仕事は男性がするものと勝手に考えていたからです。授業をきいてみると、女性の社会進出がめざましくなっている現状があることがわかりました。——数年後、自分が社会にでるときに備えて、女性が社会に出て働くという現状をもっと知るべきだと思いました。
- ・現代の働く女性が「結婚、出産しても働きたい」と考えているとわかった時、大変驚きました。——これからはもっと視野を広げて就職活動に挑もうと思いました。
- ・エネルーブやヒートテックなど身近な大ヒット商品に女性が関わっていた、しかも開発者だったことをみて本当に驚いた。この授業を積み重ねていくうちに、わたしの将来も変わってきた。とりあえずの就職ではなく、楽しいと思える職場をみつけ、結婚をして——仕事と家事や育児を両立していきたいと考えた。
- ・夢ややりたいことがなかったから大学というまだ決められていない枠に入った。——「女性としごと」を勉強して視野が広がったしやる気があれば今の時代、女性でもなんでもできることがわかった。——いまからでも遅くはないから、自分と向きあって、やりたいことというよりは、自分の好きなことを見つけていくように心がけて生活したい。(JF)
- ・この授業をうけて普通の仕事なんてなくて、みんな頑張って自分にしかできない仕事をしていることがわかった。——まだやりたいことは決まって

いません。大学生生活で自分が何をしてきたのか、自分には何が誰よりもすぐれているのかということをごきちんとしていきたいと思います。

・仕事に就き、その後の生活はどうなるかと想像したことがない。今就職ができるよう学ぶことだけでも、手にあまっている状態で、先のことを考えたくない。——今後自分が満足できるような「なりたい自分」を作りたい。

7 進路・職業決定の具体化プロセス

キャリア発達について、その研究で著名なスーパーはキャリア・レインボウというモデルを示し、キャリアを2つの視点でとらえている（注9）。1つは次のような発達段階である。

- ・成長段階（0 - 14歳）：自分がどういう人間であるかを知り、職業への積極的態、働くことの意味を深める。
- ・探索段階（15 - 24歳）職業についての希望を形作り、実践を通して職業が生涯にわたるものになるか考える。
- ・確立段階（25 - 44歳） ・維持段階（45 - 64歳） ・下降段階（65歳以降）

スーパーは新たな見解として、従来の発達段階の各段階に挿入される意志決定過程サイクルを「ミニサイクル」として追加した。空想から、試行、現実へと進むことが繰り返されると、新たな成長、探索、確立がもたらされるというのである。

大学1年生はキャリアの「探索段階」にあたるが、これまで見てきたように、大学への入り口である一年次にすでに専門職に就く進路選択を行ってきた「希望職想定有り」の学生と、将来の進路を決められないから大学に入学して決めようという「希望職想定なし」の学生の職業へのアプローチ段階が大きく異なる実態は、まさに探索段階における意志決定過程の相違を示しているものととらえられる。

その詳細は次のようなプロセスでまとめられる。

<希望職想定有り・専門職養成学科学生>

大学に入る前段階で、自分と将来・職業選択の課題に向き合っており、何ら

「大学入学次における女子学生のキャリア意識—初年次教育・キャリア教育検討に向けて—」

かのかたちで職業選択を行っている。すでにキャリア・モデルをもち、非常に明確な場合と、イメージ程度の場合との相違はあるが、つぎのようなプロセスが見いだせる。専門職以外でも、メディア関連の職業希望者などにこうした傾向は若干みられる。

①【社会への関心あり】

自分の生活の中で、社会との関わり、女性の仕事について関心を持っている



②【自己意識による職業選択】

自分と向き合い、進路を選択している。自分の生育過程のなかから、希望の職業のイメージ（保育者、幼稚園の先生、小学校の先生、給食や病院・施設などの食事とかかわる栄養士など）をつかみ、職業選択につなげている。



③【専門職育成を目指し進学】

将来その専門職につけるよう関連の大学に進学。



④【大学教育は専門職育成・その職業につくための学習】

職業選択を行っているので、その職業へ接近するため学習に取り組む。その職業に向けた学習プログラムに基づき、実習などを通してその業界の状況を知り、専門職の職業人像やキャリア・モデルと出会う場合もある。一方自分にその職業が向かないと判断した場合は、職業選択を変えることもある。



⑤【専門職として就職・社会に出る】

教育実習などを経て専門職資格を取り、その仕事につくため就職活動を行い、社会にでる。

入学以前に自己意識による職業選択を行っているため、職業に向けてのモチベーションは高く、大学進学はその職業に就くための学習期間となる。まさに自分の思いが、キャリア・モデルを持ち大学に進学し学習を重ねることで試行され、現実になっていく意思決定過程のプロセスを歩んでいる。職業人イメージをもつため、専門知識だけでなくソーシャルスキル、コミュニケーションなどの社会人基礎力についても必要性が理解できる。しかし就業

後の自己のキャリアプランは必ずしも確立していない場合が多い。「女性としごと」などで、社会で働く女性の実態を学び、結婚後の職業継続の可能性に気付くなど、生涯にわたってのキャリア・ライフプランを考えることが課題としてうかがえる。

<希望職想定なし・専門職以外の学生>

将来の進路や職業選択についてまだ十分に考えていないため大学に入学している場合が多い。それまでに社会で働く女性への関心が薄く性別役割分業を当然とし、仕事や働くことは男性のことと考えているため、自分自身が将来をめざし職業選択をするという課題に向きあうことは行っていない。前6の⑥（大学で自分の進路選択に向き合う）に書かれている状態がこれにあてはまる。

①【社会への関心うすく、働くのは男性】

職業や社会へ目が向かず関心がうすく、働くのは結婚まで、働くのは男性という性別役割分業意識がつよいことも職業への接近を行いにくくしている。



②【自己選択を行っていない】

当然、自分と向き合い将来の仕事を選択する自己選択の段階は経ておらず、それが必要なことにも気づくことがなかった。



③【進路を模索するための大学進学】

進路を決めておらず専門学校へも進みにくいいため大学に進学する、という消極的な大学進学である。



④【自分に向き合う大学教育】

職業選択を行っていないため、社会とのつながりの必要性が理解しにくい。大学教育は職業人を目指しての学習ではなく、むしろ自分探しを行う志向である。社会の状況、社会で活躍する女性たちの存在を学習することで、ようやく自分と向き合おうとしている。



⑤【見えにくい事務職】

自分探しをしながらの社会との関わり、職業選択にむけていく。専門職に

比べて企業で働く事務職の女性についてはなかなか見えにくい状況であり、キャリア・デルを持つものは少なく、自分が目指す職業人像、キャリア・ライフプランをつかむことは難しい。

このように専門職希望以外では、入学前に自己意識による職業選択を行っておらず出口の職業イメージもてない状況である。大学に入学し、ようやく自分と向き合うことを始めざるをえないことに気づき、その意味では、探索段階のまだ前段のプロセスを経していない状況にあるといえる。入学後に自己と社会との関係性を考え、自分がそれにどうかかわり何をを目指すかという教育が大学教育の中で必要とされる。

8 キャリア教育・初年次教育に向けて

これまでに把握できた入学時学生のキャリア意識の実態から、本学の場合それぞれの学科により入学動機とキャリア意識、大学での学習へのモチベーションは大きく異なっていることが確認できた。それを基に、初年次教育の在り方を想定すると、これまでみてきた職業へのアプローチの違い、それにもとづく大学教育の位置づけによる違いを内容に反映させた、次のような方向性が見いだせる。大学全体のカリキュラム構造として「教養教育」「専門教育」「キャリア教育」の3要素が想定され、ここでは「専門教育」と「キャリア教育」について言及する。

＜希望職想定有り学生を多数とする学科＞

専門職養成学科の場合は関連資格を取るためのカリキュラムの構造化がすでになされており、1年次から段階を追っての実習（教育実習、調理実習など）、実習する職場での専門職との出会い、職場環境の体験、職業に関わり子供や専門職とのコミュニケーションが積み重ねられる。専門職としての知識の蓄積と、その能力を用いてどのように社会で活動するのかの職業体験を積むことができる。また専門職養成プログラムの中にはある程度社会人基礎力にかかわることが含まれており、専門教育にキャリア教育の一部が含まれているととらえられる。

キャリア教育としては専門職に限定せず、現代社会における女性の職業生活の展開の実態や制度の活用など、生涯にわたる女性自身のキャリア・ライ

フプラン作りを視野に入れたキャリア教育を行い、女性専門職の新たな生き方を拡大する学習が必要となるであろう。

＜希望職想定なし学生を多数とする学科＞

大学入学以降に、自分と向き合い将来の進路や生き方を考え、社会との関わりへのモチベーションを高める「自分探し、社会との関係を学ぶ学習」を大学の初年次教育として含める必要が見いだせる。自分の意志で進路を決めていない状態であるので、社会とつながる就職について、当初は十分な反応を得にくい。社会とつながる自己意識形成の段階を含んだ初年次教育を行う必要が見込まれる。こうしたかたちは、社会人・職業人につながる4年間にとわたってのキャリア教育の展開とも重ねて行うこととなる。

一方専門教育については、何を専門とするか探索の時期が必要性とされよう。それを考慮しつつ、関連の資格取得などの目標設定による導入が望まれる。

企業人養成については、まだ女性の企業進出の歴史が浅く、ようやく長期就業者や管理職となる女性が登場しはじめたところである。そうした女性の企業職業人養成を専門教育としてどのように行うかは大学教育においても模索が始まったところである。本学の場合も情報教育、ビジネス関連教育をどのような専門教育とするかは大きな課題であり、試行錯誤を重ねて検討が続いている。

今回のキャリア意識の実態から見えてくることは、企業人を想定しての専門教育と、もう1つの領域である社会とつながる力を養成するキャリア教育の双方を重視し、相互に補完していく方向性が見いだせる。具体的には専門教育の科目やゼミ学習など学内のリソース（資源）とキャリア教育とを結びつけるため、体験学習やプロジェクト学習の授業実践の展開などをより有効に実現化する体制をつくること、また専門教育とキャリア教育の双方をねらった学外との連携による実践教育などが現時点で想定できる。

入学時学生のキャリア意識の実態をもとにここまで展開してきたが、ようやく課題が見えてきたところである。本学が大学教育として長く取り組んできた女性の専門職養成についてはある程度の展望が見いだせたが、企業ではたらく新たな時代の女性社会人養成については、キャリア教育を土台とした専門教育の在り方についてさらなる議論が必要とされ、残された課題は多岐

「大学入学次における女子学生のキャリア意識—初年次教育・キャリア教育検討に向けて—」

にわたることが改めて確認できた。またこのテーマは、女子大学として本学に関する問題と同時に、新たな職業進出をおこなう現代女性にとって「社会・職業と教育」の時代的变化に伴うテーマと重なり、今後多様な展開が予想される。

- (1) 仙崎 武 『キャリア教育の系譜と展開』雇用問題研究会 2008年
- (2) 関連科目にかかわるテキストとして、寿山泰二他『大学生のためのキャリアガイドブック』北大路書房 2009 年など多数が出版されている。
- (3) 唐木清志『アメリカの公民教育におけるサービス・ラーニング』東信堂 2010
- (4) 溝上慎一郎『現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ』有斐閣 2010
- (5) 青島祐子『新版・女性のキャリアデザイン』学文社 2011年
- (6) 東京女子大学『女性学・ジェンダーの視点に立つ教育—女性の自己確立とキャリア探求の基礎をつくるリベラル・アーツ教育—取組報告書』2007年3月。この他にもメインテーマとなる問題については、東京女子大学女性学研究所編『女性とキャリア』（勁草書房、2009年）が刊行されている。
- (7) 聖心女子大学キャリア教育研究会『聖心女子大学におけるキャリア教育の指導プログラム開発』2009年6月
- (8) 資料 日本女子大学『リカレント教育課程』、2009年
- (9) 渡辺三枝子著 『キャリアカウンセリング入門—人と仕事の橋渡し』ナカニシヤ出版 2001年

